

AGU NEWS No. 34

青山学院大学

AGUニュース第34号
[2006年11月～12月号]
青山学院大学・広報入試センター広報課
〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25
TEL.03-3409-8111(代表)
URL <http://www.aoyama.ac.jp/agunews/>



青山キャンパス

特集  AOYAMA
GAKUIN
UNIVERSITY

青学スポーツの“強さと魅力”

AGU TOPIC

会計プロフェッション研究科に
博士後期課程「プロフェッショナル会計学専攻」(2007年4月)開設

「魅力ある大学院教育」イニシアティブに
「国際マネジメント実践的研究者育成」が採択

TOPICS

第3回eLPCOオープンフォーラム

—現代GP「e-Learning専門家の人材育成」事業成果中間報告会
フレッシュャーズ・セミナー公開授業
青山ビジネススクール創立15周年記念国際シンポジウム開催

報告・お知らせ

青山学院大学後援会報告

誌上公開講座

テーマ別科目 歴史理解関連科目
「青山学院大学の歴史」

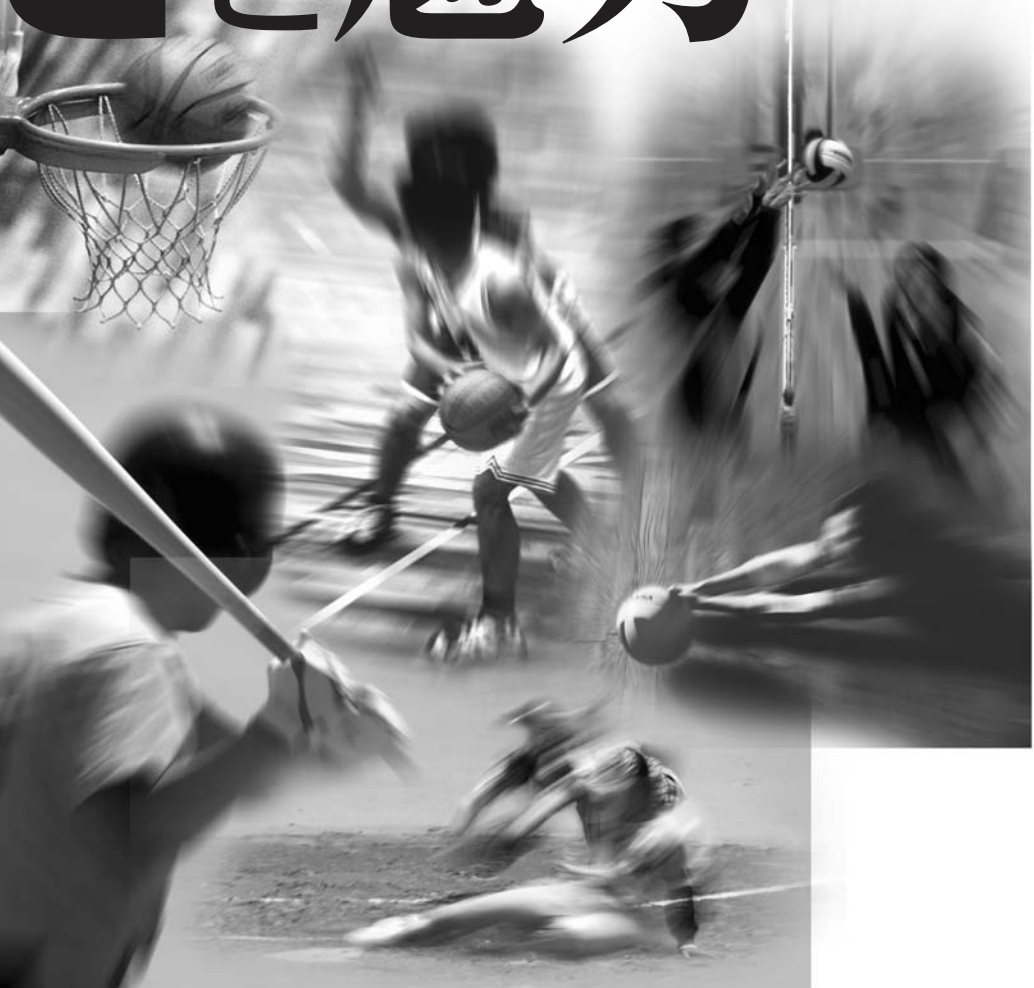
INFORMATION

オープンキャンパス開催報告
高校1・2年生のための大学説明会

特集

青学スポーツの “強さと魅力”

見事なチームワークと最後まであきらめない闘志あふれるプレー……今年度も、春から本学体育会各団体が活躍。今回の特集では、そのうち「硬式野球部」「準硬式野球部」「バレーボール部(女子)」「バスケットボール部(男子)」をピックアップ。選手や監督の生の声を通して、それぞれの“強さと魅力”にせまってみました。また、野球応援でスタンドを盛り上げてくれる2つの団体の学生たちにもお話をうかがいました。



抜群のチームワークで、「大学日本一」を目指す

硬式野球部

東都大学野球春季リーグ戦で3季連続12度目の優勝、そして全日本大学野球選手権2年連続出場&準優勝を果たした硬式野球部。エース・高市投手とチームを支える堀主務、本郷部長、河原井監督からお話をうかがいました。



硬式野球部 投手

高市 俊 君

(国際政治経済学部
国際経済学科)

温かいフロリダの気候の中で早めの調整を行って臨んだ、今年の春季リーグ戦……開幕当初の調子は今ひとつでしたが、東洋大学に2連敗した後も自信を失うことなく、1試合1試合集中して、強い気持ちで投げることができました。それというのも、チームのみんながチャンスを確実に生かして点を取ってくれ

たからです。プレーオフの末にリーグ戦3季連続優勝という結果を手にすることができたのは、投手と野手がお互いを支え合う青学野球の底力が発揮されたからだと思っています。

昨年に続いて出場した全日本大学野球選手権大会では、全国のさまざまなタイプの打者と対戦できて、個人的にはとても楽しかったです。ただ、決勝戦で惜敗したことはショックでした。もちろん、準優勝でも十分に素晴らしい結果だとは思いますが、目の前で「日本一」を逃した悔しさに、久しぶりに落ち込みました。

とはいえ、いつまでもクヨクヨしてはいられません。大学生活最後のリーグ戦を悔し涙で

終わらせないためにも、打者の裏をかく“考える”ピッチングにさらに磨きをかけ、自信を持って試合に臨みたいと思っています。もちろん、青学生のみなさんの声援も大きな力になります。ぜひ、神宮球場のスタンドに応援に来てください!





硬式野球部
主務(マネージャー)
堀 圭典 君
(経済学部第二部
経済学科)

青学チームの強さの秘訣? 実は部員である私自身、あまり「強い」とは思っていないのです。しかし、「素晴らしい」チームであることは断言できます。

ふだんは、どちらかというとマイペースな選

手たちですが、いざ野球のこととなると、全員が同じ方向を向いて一致団結します。上級生と下級生の仲もとても良く、選手間のコミュニケーションも抜群。試合となれば、全員が勝利に向け、気持ちを一つにして戦っています。

今年思い出に残る試合と言えば、やはり、全日本大学野球選手権大会の決勝戦。もちろん負けた悔しさはありましたが、それより全力を尽くして戦った選手たちの姿に清々さを感じました。春季リーグ戦の優勝決定戦(プレーオフ)対亜細亜大学戦も忘れられません。

この時はベンチに重苦しいムードが漂っていたのですが、マネージャーとしてなんとかムードを盛り上げようと、いつにも増して大声を出しました。そして、多くの観客で埋まったスタンドからの声援にも後押しされての勝利。選手たちの目に浮かぶ涙を見て、私は心から「よかった!」と思いました。

青学は神宮球場にいちばん近い大学。秋季リーグ戦でも、見る人に感動を与える試合をしていきたいと思っていますので、硬式野球部への応援をよろしくお願いします。



硬式野球部 部長
本郷 茂
(経済学部教授)

今春、硬式野球部は、恒例の指宿キャンプの代わりに、米国・フロリダ州ジャクソンビルにて海外キャンプを行いました。現地では地元の北フロリダ大学をはじめとする全米レベルの強豪大学と練習試合を行い、昨年も活躍した4年生を中心としたチームが、見事な勝利をおさめていました。

このキャンプからオープン戦にかけて、主将の円谷英俊君が、チームを実に良くまとめてくれました。いわゆるスター的選手がいない青学野球が強いのは、こうしたチームのまとまりが生む総合力、そしてそれを引き出す河原井監督の人柄ではないかと、私は思っています。

春季リーグ戦では亜細亜大学とプレーオフまでもつれこみながらも、見事優勝。続く全日本大学野球選手権大会では2年連続「大学日本一」は逃しましたが、私は最後まであきらめずに頑張った選手たちを誇らしく思いました。ただ、河

原井監督は、この決勝での敗戦で相当悔しい思いをされたようですが……。

秋季リーグ戦もこれまでの戦いぶりから見て、大いに期待できると私は思っています。贅沢を言えば、ただ勝つだけではなく、主力である4年生が、自分たちが去った後の来年度につながる戦いを見せてほしいと思います。そしてもちろん、11月には全国の強豪が集まる明治神宮野球大会に出場し、今度こそ「日本一」に輝いてくれることを願っています。



硬式野球部 監督
河原井 正雄

今年は、昨年の活躍によって自信を深めた4年生が中心のチームで開幕に臨み、当初から優勝候補と目されていました。とはいえ、亜細亜大学、東洋大学など強豪ひしめく東都大学1部リーグは、実際に戦ってみるまで、どうなるかわかりません……。しかし、そんな心配は杞憂でした。巧みに球種を使い分ける高市投手の頭脳的なピッチングは相変わらず冴え、野手陣もチャンスに強いバットングでエースを支え、3季連続優勝のプレッシャーを跳ね返す戦いぶりを見せてくれました。全日本大学野球選手権大会では準優勝に終わり、私も選手も大いに悔しさを味わいましたが、本学が作った同大会連勝記録は、今後しばらく破られることはないでしょう。

野球の技術面だけなら、青学チーム以上の大学は多いかもしれせん。部員数も他の強豪大学に比べると半分の50名弱です。しかもその半数が一般入学の学生で占められています。しかし、野球に対する高い意識と勝利を目指す熱いハートに関しては、どこにも負けないという自信があります。レギュラー陣はもちろん、ベンチ入りできなかった選手やマネージャーの学生も、心を一つにしてともに頂点を目指す……そんな彼らの姿勢と人間性を私は誇りに思っています。

準硬式野球部 悲願のリーグ1部復帰を果たす!



準硬式野球部
2005年度主将
佐藤 遼 君
(文学部教育学科)

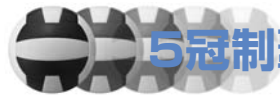
私たち準硬式野球部は、平成18年度東都大学準硬式野球春季リーグ戦において、9勝2敗という戦績で優勝。続く駒澤大学(1部)との入れ替え戦では2戦連勝し、7年ぶりに1部に返り咲きました。

今シーズンの好調は、春季リーグ戦で最優秀投手に輝いたエース・今井理遼の存在が大きかったのですが、もうひとつ全員でテーマとして掲げた「つなぐ野球」を一試合一試合でしっかり実践することができたことも大きな要因だったと思います。勝利を重ねながらチームの雰囲気も次第に高まり、集中力も高まっていくのを感じていました。

私たちの部では、練習メニューなどを部員の意見によって決めており、学生主体で強いチーム作りを行っています。私自身と

しては主将を務めた今シーズンほど、頭を使って野球に取り組んだことはありませんでした。おかげでチームを見る目、自分自身を見る目を養うことができたと思います。この経験は、社会人となった時に大きな力となると確信しています。

もちろん、同じ野球を愛する青学生として硬式野球部の活躍からも、いつも大きな刺激をもらっています。秋のシーズンもともに頑張らしましょう! 私も時間の許す限り応援に駆け付けたいと思っています。



5冠制覇へ向けてチャレンジは続く!

女子バレーボール部

春季リーグ戦、東日本インカレ、シモンズ杯、秋季リーグ戦、全日本インカレと続く、女子バレーの5大会。完全制覇を目指す青山学院大学女子バレーボール部は、すでにシモンズ杯までの3冠を達成! 本誌が発行される10月末には、昨年の雪辱に燃える秋季リーグ戦の結果も見えているはず…。 “最後の秋”に臨む4年生3名の言葉から、青学女子バレーボール部の強さの秘密を探ります。



女子バレーボール部
主将・セッター
秋山 美幸 さん
(文学部史学科)

全部員の一体感が私たちのパワーの源。この“一体感”は、ただ部員同士仲が良いというだけではなく、先輩後輩を問わず、誰もが意見をオープンに言い合える関係を築けていることが特長です。一人ひとりが自主性を持って練習に取り組み、練習を“やらされている”人は一人もいないと自信を持って言えます。

だからといって、日本一厳しく、悲壮感漂うピリピリした空気なかで練習しているのかといえば、はっきりと「NO!」です。時折笑い声もこぼれ、和気あいあいといった楽しい雰囲気での練習が青学流。もちろんボールに触れる一瞬一瞬は、集中してプレーします。緊張感を常に持ち続けることは難しいので、ここぞ!というときに集中力を高める練習方法が、実際の試合でも生きているのかもしれない。

今年の春には8名の1年生が入部。ここ数年なかった20名を超える部員数になり、チーム内の競争も激しくなりました。秋には「打倒青学」を目指して、他のチームも強くなっているでしょうが、私たちもパワーアップしています。もっとも追われる立場とのプレッシャーは感じていません。秋季リーグ戦では、これまで優勝したことがないので、むしろチャレンジャーの気持ちです。自分たちのプレーをすれば、結果は付いて来るはず。この秋も全員でバレーボールを思い切り楽しみます!



女子バレーボール部
センター
二川 万里子 さん
(文学部教育学科)

練習中は集中して練習し、遊ぶときは思い切り遊び、そしてしっかり勉強もする。このメリハリの効いたスタイルが、青学女子バレーボール部の強さの秘訣。生瀬監督は学業に関しても厳しいので、部員みんなで「めざせ!文武両道!」です。授業のある日の練習時間は、3時間程度と決して長くはありませんが、だからこそ集中して、中身の濃い練習が出来るのだと思います。

負けず嫌いな私のコート上でのモットーは「やられたらやり返す!」。目の前でスパイクを決められた後は、必ず倍してお返しします。今年は最上級生となり、下級生をプレーで引っ張って行こうと考えてシーズンに入りました。目標の五冠達成に向けて、まだまだエンジン全開で頑張るつもりです。

秋の大会を控えた夏休み後半には実業団チームとの合同合宿を行い、練習試合では対等以上のプレーができ、部員一同さらなる自信を深めました。もちろん気を緩めることなく1試合1試合を大切に、秋から冬にかけて季節は寒くなりますが、みなさんに熱いプレーをお見せします。ぜひ応援に来てください。



女子バレーボール部
主務(マネージャー)・レフト
柴田 麻衣子 さん
(経営学部経営学科)

プレーヤー兼主務(マネージャー)を務めています。もちろん練習はみんなと同じメニューをこなし、それ以外に主務として、大会出場の申請、遠征時のスケジュール管理や宿泊の手配など、さまざまな業務を担っています。仕事が多くて大変な時もありますが、チームが大会で優勝すれば、それまでの苦労が吹き飛ぶとともに、「裏方が一生懸命頑張るからこそ、チームが強くなる」と自分で納得しています(笑)。いまでは主務の仕事にやりがいを感じるようになりました。

思えば、青学女子バレーボール部の4年間ではいろいろな経験ができました。印象的なのは、昨年のカナダ遠征。ホームステイながら、現地の大学と合同で練習や試合を行いました。異国での生活を通じて、バレーボールの技術面だけでなく、人間的にも大きくなったと思います。

そして迎えた“最後の秋”。4年間の思いのすべてをぶつける時が来ました。最後にして最高のフィナーレを飾れるように、プレーする選手も見守る選手も全員が気持ちをひとつにして、ただ“前進あるのみ”です!



熱い男たちの目標はつねに「日本一」!

バスケットボール部

関東大学選手権3位、関東大学新人戦優勝と、今シーズン良いスタートを切ったバスケットボール部。秋季リーグ戦を目前にした9月初旬、岡田主将、宮崎主務、そして長谷川監督に、今年のチーム状況と、全日本学生バスケットボール選手権大会(インカレ)に向けた抱負をうかがいました。



バスケットボール部
主将・シューティングガード
岡田 優介 君
(国際政治経済学部
国際経済学科)

昨年のチームから、大学日本一を目指すバトンを渡され、「やってやる!」という強い気持ちでスタートした今年のバスケットボール部。主務、学生コーチを含む私たち4年生8人を中心に、早い段階からチームのまとまりを作ることができたと思っています。特に私が心がけたのは、上級生・下級生関係なく、お互い何でも言い合える関係を築くことでした。

5月の関東大学選手権大会では、十分に優勝を狙えるチャンスがあったので、ちょっともったいないことをしたと思っています。6月の関東大学新人戦は、見事優勝!後輩たちの頑張り、上級生も大いに刺激され、チームに勢いが生まれました。また個人的には、7月に

長谷川監督、主務の宮崎、副将の正中、2年生の荒尾らと参加し、各国のチームと対戦した「第28回ウィリアム・ジョーンズカップ国際バスケットボールトーナメント」での経験が大きな自信になりました。

リーグ戦の開幕には、ポイントガード正中をケガで欠くなどのアクシデントがありましたが、チームの雰囲気はインカレ優勝に向けて確実に高まっています。選手個々の技術の単純な足し算では、青学チームは他の強豪大学に劣るかもしれません。しかし、チーム一丸となった時に発揮される「+α」の強さはどこにも負けない自信があります。青学生のみならず!

私たちの日本一に向けた挑戦に、熱い応援をよろしくお願いします。



バスケットボール部
主務(マネージャー)
宮崎 智之 君
(経済学部経済学科)

今年の4年生は、バスケに対してとても真面目に取り組むメンバーばかり。長谷川監督の熱血指導の下、つねに努力を怠らない彼らの真摯な姿勢は、下級生にも浸透し、マネージャーとしてバックアップしがいがあるチームになっていると感じています。そして、春から多

くの試合経験を通してたくましさや激しさも身につけ、国際試合も経験した岡田と正中を核に、どの大学にも勝てるポテンシャルを持ったチームに成長。佐藤託矢(現・三菱電機)、大屋秀作(現・日立)の両先輩を擁した昨年度のチームが果たせなかったインカレ優勝を視野に入れて、今年も秋のリーグ戦に臨みます。

今年は他の強豪大学もチーム力がレベルアップしています。しかし、どんな相手にもひるまず、全員一丸となった攻撃的なバスケットを展開すれば、必ず勝機はあります。岡田主将に

韓国・延世大学との親善試合開催

2006年8月、20年以上にわたり本学バスケットボール部と交流を行っている韓国・延世大学バスケットボール部が来日。本学との親善試合が、8月15日(火)・16日(水)の両日に相模原キャンパスアリーナで、18日(金)に青山キャンパス記念館で行われました(結果は本学が2勝1敗)。

延世大学バスケットボール部は、現在、韓国大学バスケットボール界実力No.1を争う強豪チームです。

対する選手たちの信頼も厚く、ケガ人はいるもののチーム状態は万全……余談ですが、岡田は成績も学科トップクラスで、勉強の面でも、他の部員たちの刺激になっています。

私たちマネージャーやスタッフも、「勝ちたい!」という気持ちは選手と同じです。「もっとチームを強くするために」という全員に共通する目標に向け、一人ひとりが自分にできることに自主的に取り組み、ともに勝利の感激を味わいたいと思っています。そして多くの青学生のみなさんにも、私たちとともにこの喜びを味わっていただきたいと思っています。



バスケットボール部
監督
長谷川 健志

今年の男子選手は総勢15名。全国の強豪大学の中では、圧倒的に少ない部員数です。また、今年は平均身長も他大学に比べて低いのですが、こうしたハンディを補うのが、量的にも質的にもわが国トップレベルの練習です。特に専門のトレーナーによるウエイトトレーニングは、スピード、持久力、コンタクトの強さといったフィジカル面でのレベルアップに大きな成果を上げており、大学スポーツ界はもちろん、プロリーグでも本学ほどのスタッフと施設を整えているチームは数少ないと思います。

また、バスケットボールは、からだだけでなく、頭も使わなく

ては勝てないスポーツですから、さまざまな対戦相手にフレキシブルに対処するための戦術理解も、日々の指導では重視していますし、メンタルの強さも徹底的に鍛えます。

練習中はもちろん、試合中も大声で選手を叱咤する私は、おそらく日本一恐れ監督でしょう(笑)。しかし、ただ厳しいだけではなく、各大会後は試合のデータ等を基に一人ひとりと面談し、反省点や個々の目標を話し合うなど、つねに各選手の成長を大切にしています。

彼らとともに「日本一」になる喜びを味わうために……私も日々全力で戦っています。

スタンドからプレーを支える学生たち

同じ大学の学生である選手とともに、スタンドから「勝利」をめざす……大学スポーツに欠かすことができないのが「応援」です。今春のリーグ戦でも、華やかで、力強い野球応援を繰り広げてくれた「吹奏楽バトントワリング部」「応援団」のみなさんにお話をうかがいました。

吹奏楽バトントワリング部



吹奏楽バトントワリング部 部長
成田 暁彦 君
(理工学部電気電子工学科)

私たち吹奏楽バトントワリング部は、名称の通り(吹奏楽)とく(バトン)の2つのパートから成っており、それぞれ吹奏楽のコンクールやバトン・オン・パレードなどといった異なった目標に向けたパート別の活動も行っていますが、定期演奏会やオープンキャンパス、そして神宮球場での硬式野球部の応援では、2パート合同での演奏・演技を創り上げています。

野球応援では、応援団とも協力し、吹奏楽演奏はもちろん、スタンドからの応援歌や声援でも、同じ青学で学ぶ選手たちのプレーをバックアップしています。

硬式野球部の強さは、私たちの部にとっても大きな励みとなっています。秋のシーズンも、選手一人ひとりに「思い」が届くよう、力の限り応援していくつもりです。



吹奏楽バトントワリング部
吹奏楽パート応援責任者
近藤 衣里子 さん
(文学部日本文学科)

神宮球場に集まった観客の方々、そしてグラウンドの選手と一体になって盛り上がり、プレーの一つひとつに声援を送る……そんな母校を応援する楽しさを一人でも多くの青学生に知っていただき、たくさんの人に球場まで足を運んでいただけるよう、今春もバトンパートや応援団と力を合わせて、スタンドでの応援に力を入れました。

東都大学リーグ戦は平日開催の試合が多く、応援責任者として試合当日の部員集めに苦労したこともありましたが、硬式野球部が試合に勝ってくれることで、逆に私たちも元気をもらいました。私にとって学生としての応援は、今年度で最後になるので、硬式野球部にはぜひ日本一に輝いてもらいたいですね。



吹奏楽バトントワリング部
バトンパート応援責任者
高山 美穂 さん
(文学部教育学科)

バトントワリング部は現在9名。私を含めて大学に入学後にバトンを始めた人がほとんどです。高校時代、野球部のマネージャーだった私にとって、春のリーグ戦での野球応援はやはり力が入ります。スタンドから硬式野球部の選手たちが頑張っている姿を見ると、自然に「同じ青学生として、私たちももっとバトンを頑張ろう!」と熱い思いが込み上げてきます。

吹奏楽演奏に合わせてのバトン演技では、声や笑顔を含めて自分たちなりの応援ができるよう心がけ、観客の方々に勝利への希望と元気を与える応援をめざしています。秋のリーグ戦では、私たちに代わってチアリーディング部がスタンドを華やかに盛り上げますので、ぜひ多くの青学生に球場に集まっていたきたいと思います。



応援団



応援団 団員
奥山 諒 君
(文学部英米文学科)

子どもの頃から野球が大好きだった私は、大学入学後、野球応援をしたいと思い、応援団に入団しました。強豪大学がひしめく東都一部リーグで、昨年、今年と素晴らしい戦いぶりを見せてくれた硬式野球部。その強さの秘訣は、ミスや無駄なプレーが少ないことにあります。私たちとしても実に応援のしがいがあるチームでした。青学チームのピンチには、私がバケツの水をかぶって沈滞しがちなスタンド

のムードを変えたり……私たちも選手と共につねに勝利をめざす気概を持って応援させていただいています。同時に観客を盛り上げ、楽しんで応援してもらえるスタンドの雰囲気作りにも心を砕いています。

野球応援を通して、私は自分の中で愛校心が育まれていくのを感じます。今では青学を愛する気持ちは、誰にも負けません!



応援団 団員
呉屋 浩平 君
(文学部日本文学科)

“**日**本一”こそあと一步のところでは逃げましたが、昨年度に続き、今春も東都一部リーグでその強さを見せつけてくれた硬式野球部。今や彼らの活躍は青学生にとって大きな誇りであると言っても過言ではないでしょう。大学の名前を背負って試合に臨む選手の方々には、秋のシーズンもそれに恥じない試合を見せていただきたいと心から願っています。私たち応援団も、スタンドで選手の皆さんに負けな

よう、つねに気合い十分で応援させていただきます。そして、授業の都合が付く限り、できるだけ多くの青学生に神宮球場に来ていただきたいと思っています。私たちと一緒にグラウンドの選手たちに、力強い声援を送り、勝利を呼び込む応援歌やカレッジソングを歌いましょう!

きっと自分が「青学生」であることの喜びと誇りを感じることが出来るはずですよ。



2007年4月、専門職大学院「会計プロフェッション研究科」に 博士後期課程「プロフェッショナル会計学専攻」開設

会計プロフェッション研究科では、2007年3月に初めての修了者を輩出するのに合わせて、2007年4月より同研究科に独立した博士後期課程「プロフェッショナル会計学専攻」を発足します。わが国の会計専門職大学院で初めての試みとなる、この新しい博士後期課程について、研究科長を務める鈴木豊教授に設置の趣旨と教育・研究の概要についてお話をうかがいました。



会計プロフェッション
研究科長
鈴木豊 教授

2005年度にスタートした会計プロフェッション研究科(会計プロフェッション専攻)は、いわゆる専門職学位課程で、修了者には「会計修士(専門職)」の学位が与えられるとともに、新公認会計士国家試験の短答式試験が一部免除されます。

こうした実務と理論を融合させた会計専門職のための会計学教育は、まだわが国で始まったばかりですが、企業会計のグローバル化を踏まえた今後の展開を考えると、本学を含む会計専門職大学院での教育にあたる教員(研究者教員・実務家教員)養成が急務といえるでしょう。また、グローバル化が進み、厳しくアカウンタビリティが問われている現在の会計・監査をめぐる社会環境の中で、公認会計士、税理士等の資格保有者や企業会計のエキスパートの方々にも、高度な理論研究への意欲の高まりが見られます。

本学では、こうした現代社会が求める実務を視野に入れた新しい会計学を「プロフェッショナル会計学」と位置付け、新設する「プロフェッショナル会計学専攻」

では、本学を含む会計専門職大学院などで会計プロフェッション教育に携わる研究者教員・実務家教員および社会の各分野で高度な研究能力によって経済社会の発展に寄与する会計プロフェッションの育成を目指します。

「プロフェッショナル会計学専攻」では、会計プロフェッション専攻で学び、さらに博士レベルの高度な理論研究に取り組みたいという大学院生のほか、公認会計士や会計業務のキャリアを有するビジネスマンおよび公務員などのリカレント教育希望者にも広く門戸を開いています。そのため、昼夜開講制を採用し、企業等で働きながら博士の学位の取得を目指す方々にも十分配慮した研究指導体制と環境を提供していきます。

「プロフェッショナル会計学専攻」の修了年限は標準で3年以上となりますが、優れた研究業績等を有する方に関しては、2年あるいは1年の在学中で博士の学位を取得することが可能です。また、冬に予定している第1回の入学試験では、社会人の志願者に関しては、過去の実務経験を十分考慮した選抜方法を考えています。

もともと本学の会計プロフェッション研究科では、単に公認会計士の資格取得だけではなく、幅広い会計プロフェッション教育を志向しており、その一例として他の会計専門職大学院では見られない修士論文作成のための研究指導も行っていきます。今回、全国の会計専門職大学院をリードして、早くも博士後期課程である「プロフェッショナル会計学専攻」設置に踏み出すことができたのも、こうした独自の教育姿勢と世界的に見ても充実したカリキュラム体系と施設及び教員スタッフを擁する本学「会計プロフェッション研究科」だからこそと自負しています。



平成18年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブに、 国際マネジメント研究科の「国際マネジメント実践的研究者育成」が採択

文部科学省の平成18年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブに、本学国際マネジメント研究科の「国際マネジメント実践的研究者育成」が採択されました。「魅力ある大学院教育」イニシアティブは、現代社会の新たなニーズに応えられる創造性豊かな若手研究者の養成機能の強化を図るため、大学院における意欲的かつ独創的な教育の取組を重点的に支援するもので、「21世紀COEプログラム」とともに、世界に通用する教育・研究拠点構築を図る重要な国家プロジェクトです。その採択を受けた「国際マネジメント実践的研究者育成」の概要と取り組みの趣旨について、研究科長を務める伊藤文雄教授にお話をうかがいました。



国際マネジメント
研究科長
伊藤文雄 教授

私たちが数十年の歳月の中で追い求めてきた「夢」。それは、各国と協調しながらアジア全体の持続的発展を可能にする「アジアMBA」を育成する世界レベルの大学院教育・研究です。

1987年に国際政治経済学研究科に5年一貫性の博士課程を、そして1990年に同研究科に夜間大学院を設置した当時から、私たちは今回のプログラム「国際マネジメント実践的研究者育成」を一つの理想としていましたが、当時は教育の法整備面などで時期尚早でした。しかし近年の社会・経済の急激なグローバル化の中で、私たちは国の法制度整備を促しながら、2001年にわが国の私学で最初の「専門職大学院」、さらに「専門職大学院」とわが国における高度専門職業人養成のフロントランナーとしての実績を積み上げてきました。そして今年度より5年一貫制博士課程である「国際マネジメントサイエンス専攻」をスタートさせ、今回、「魅力ある大学院教育」イニシアティブに採択された「国際マネジメント実践的研究者育成」によって、私たちの理想がようやく完成形としての姿を表したことになります。

「国際マネジメント実践的研究者育成」は、博士課程(Ph.DとD.B.A.)教育を目的としたもので、世界レベルで通用する独創的な研究者を育成するための教育プログラムです。1987年以来、15名の課程博士を輩出してきた実績をベースに、今後は次の2種類の課程博士の育成に力を入れていきます。

- (1) 5年一貫制のPh.Dプログラムでは、博士(国際経営学)の学位を有するアジア・ビジネススクールの教員養成
- (2) MBAなど修士課程修了者を対象とする3年制のD.B.Aプログラムでは、

博士(経営管理)の学位を有し、企業組織等で現実問題を解決に導く中核研究者となる人材育成

「国際マネジメント実践的研究者育成」のカリキュラムでは、本研究科の核となる理論と実践の融合を特色とした「コアプログラム」のいっそうの充実を図るとともに、グローバルな活躍を望む学生たちの「期待」に応える以下のような「期待プログラム」を展開していきます。

- (1) 海外大学より招聘した客員教授の先端的な研究領域に触れる機会を創出し、研究の国際化を実現していく。
- (2) 国際学会への参加を促すと同時に、国際学会での発表能力を育成することにより、博士論文の研究水準を国際水準にまで引き上げていく。
- (3) 「Global Action Teaching&Research」を配置し、理論と実践との架橋を実験する教育研究の機会を与え、国際マネジメントの実証的な研究深化を図る。

「Global Action Teaching&Research」は、実践(現実問題の解決)——研究(国際マネジメント実践的研究者育成)——教育(アジアMBA育成)のサイクルによる教育プログラムで、現実社会の問題を熟知した上で、研究成果を積み上げ、それを教えることができる能力を実践的かつ効果的に修得できる画期的な教育プログラムです。

また、研究指導プロセスをシステムティックで明確なものとし、博士後期課程における公開研究指導システムの導入により、学生間の競争的研究環境を醸成し、学位論文のクオリティマネジメントの徹底化を図っていることも大きな特色です。研究指導を担当する教員スタッフも、海外大学のPh.D取得者を多く揃え、さらに海外から第一級の研究者を客員教授として招聘するなど、グローバルな視野での最先端研究環境も整えています。

そして各国と協調しながら、アジア全体の持続的発展に寄与する「アジアMBA」育成のためには、昨年、本研究科が核となって発足させたアジア太平洋地域の約20大学が参加する「ABEST21」など、海外連携校とのネットワークもフルに活用していきます。……今回の「国際マネジメント実践的研究者育成」は私たちの当初の理想の一つの完成形といえますが、ゴールではありません。今後もグローバル社会の環境変化を見据えながら、それを上回るスピードで進化することを自らに課していく所存です。

ラミーWTO事務局長講演「Challenges of the DDA」 WTOドーハ開発ラウンドの課題

本学附置WTO研究センターでは、WTO（世界貿易機関）に関わる諸問題について、その現状を把握し、学際的な視点からそれらの解決策について議論する場を設けています。

2006年7月6日（木）には、スイス（ジュネーブ）からパスカル・ラミーWTO事務局長（WTO Director-General: Pascal Lamy）を迎え、「WTOドーハ開発ラウンドの課題」（Topic: Challenges of the DDA）と題する講演会が開催されました。

本講演は、現在のラウンド（交渉）で各国の歩み寄りが見られないために、全ての加盟国から交渉の調整役を任されたラミー氏が、最初の訪問国として日本を選んだことがきっかけで、外務省経済局の御支援により実現したものです。

当日の会場となった総研ビル12階（最上階）には、政府関係者、学生・院生、大学研究者やマスコミなどから約170名の出席があり、武藤学長による歓迎の辞に続き、ラミー事務局長が約40分間お話しされました。続く質疑応答では、国連大学研究者、消費者団体代表、マスコミ記者、大学研究者などから鋭い質問が出されましたが、ラミー氏は「私は、各国政府が交渉で使おうとポケットに閉まっているカードの中身を聞き出す立場にあり、ここで今それを明かすことは、交渉のスムーズな展開を妨げることになる」として、交渉の調整役として難しい立場にあることを強調する場面が見られました。ラミー氏の発言趣旨は、ほぼ次のようです。

「約150カ国・地域が加盟するWTOは、国際貿易の自由化を促進することによって国々の経済厚生（welfare）を大きくすることに寄与する多数国間貿易協定であり、交渉のフォーラムでもある。先回のウルグアイ・ラウンド（1986～94年）では、WTO設立準備に加えて非常に広範囲の問題

につき交渉されたが、2001年にスタートしたドーハ開発ラウンドでは、主に農業分野とサービス分野の二つが中心でありながら、その交渉議題は、各国の国益が複雑で絡んでいる。そのため、東京ラウンド（1973～79年）やウルグアイ・ラウンドを含めて過去8回開催されてきた多国間交渉（ラウンド）に比べて、格段に難しい交渉になっている。

先のラウンドでは、EU、米国、日本など先進国の貿易利益が確保され、今回のラウンドでは、“開発”（development）と明記されているように途上国および後発途上国の貿易利益が確保されるものでなければならず、農業補助金、農産物の輸入関税、鉱工業品（NAMA）の関税上限（タリフライン）の三項目で、先進国側の譲歩が必要である。」

なお、報道によればラミー氏は、米国が国内農業補助金を200億ドルへ削減すること、G20の国々が農産品の平均輸入関税削減率を57%に引き上げること、および途上国がNAMAのタリフラインを20%まで引き下げることを、の三つを交渉の落着き先と考えていたようです。7月27日（木）にジュネーブで開催されたWTO一般理事会で、ドーハ開発ラウンドの全分野での交渉凍結が正式決定されています。ドーハ開発ラウンドは長期化する可能性があります。

（司会 岩田 伸人 WTO研究センター所長 記）



「各国大使講演シリーズ」第6回 ソルマズ・ウナイドゥン駐日トルコ大使 「Turkey, Bridge between East and West」

トルコと日本とは近代化の過程でともに地理的、文化的、また宗教的に数々のディレンマを抱えてきました。すなわち、トルコはヨーロッパとイスラムあるいは中東の間で、また、日本は欧米とアジアの間で、国家のアイデンティティや外交上の位置づけなどでよく似たディレンマを持っています。こうした両国の悩みは、米国ブッシュ政権のイラクの政策に対する両国の姿勢にも現われています。

各国大使講演シリーズの第6回として、ソルマズ・ウナイドゥン駐日トルコ大使が、7月4日（火）、本学で「トルコ—東西の架け橋」と題して講演を行いました。大使は1967年にトルコ外務省に入られて以来外交官として活躍



され、スウェーデンとポーランドの大使を務められた後、2003年から駐日大使をされておられます。

講演の中で大使は、トルコがNATOに加わるときにはヨーロッパ各国が賛成したのに、トルコのEU

（欧州連合）加盟についてはフランスなどヨーロッパ諸国の多くが、トルコ国民がイスラム教徒だからとか、人権やキプロスの問題があるとか言って賛成しないのはダブルスタンダードだと批判されました。また、9.11以後の対テロ政策に関連して、イスラム教とテロリストとを同一視すべきでないという強調されました。そして、イラク問題への対応について、日本は陸上自衛隊を人道支援目的で派遣したが、トルコの政策には地理や外交利権的理由から、微妙な違いがあると指摘されました。さらに、日本とトルコの関係については、今年1月の小泉首相のトルコ訪問にふれて、トルコの世論調査では日本が最も好感を持てる国として選ばれることが示しているように、2010年にはトルコで「日本の年」が計画されており、さらなる両国間の発展が期待されると述べられました。

質疑応答では、トルコのアイデンティティ、軍と政府の関係、EU加盟問題、トルコと日本の近代（西欧）化問題など多くの質問が出席者から出され、大使との間で活発なやりとりがかわされました。毎日新聞社とジャパン・タイムズに加えて、今回は日本・トルコ協会も共催者に加わりました。今回の大使講演が、初めての女性大使の講演だったこともあり、約200名が時がたつのを忘れて熱心にウナイドゥン大使の雄弁な講演に聴き入りました。

（司会 国際政治経済学部長 土山 實男 記）



ソルマズ・ウナイドゥントルコ大使

第3回eLPCOオープンフォーラム —現代GP「e-Learning専門家の人材育成」事業成果中間報告会



2006年9月21日(木)、青山キャンパス総研ビルにおいて「第3回eLPCOオープンフォーラム—現代GP「e-Learning専門家の人材育成」事業成果中間報告会—」が開催されました。フォーラムは武藤元昭学長と秋元実治総合研究所所長のご挨拶で幕が開き、武藤学長からは、これからも本学院の総力を挙げて現代GP事業を推進していきます、との力強いお言葉をいただきました。

当日は、他大学教職員、企業人を中心に、さまざまな分野で活躍されている、138名もの大勢の方々が参加されました。今回のフォーラムでは、総合研究所eラーニング人材育成研究センター(eLPCO)の成果を体感してもらおうと、さまざまな嗜好を凝らした催しが行われました。

模擬授業では、「eラーニング専門家育成プログラム」の入門講義科目のひとつである「インストラクショナルデザイン総論」を題材に、寸劇などを交えながら行われ、対面授業とeラーニングとを組み合わせたブレンディッドラーニングの醍醐味が楽しくかつリアルに味わえる内容となっていました。

展示室では、出版本、eLPCO 成果報告書の展示、各種パンフレットの配布および紹介ビデオの掲示のほかに、メンタリングケース紹介やサイバーキャンパスシステム(CCS)体験コーナーなども設けられました。

談話室(eラーニングよろず相談室)では、eLPCO所属の5種類の専門家が、参加者から寄せられたeラーニングにおけるさまざまな悩みに対して、それぞれの知識と経験から的確に答えしていました。今後もぜひ相談に乗って欲しいとの要望も多数受けました。

パネルディスカッションでは、本学関係者の他に、外部からは日本商工会

議所事業部長の青山伸悦氏に参加いただきました。社会人、教職員、学生が、それぞれの立場から、eラーニングの広がりとその課題、本学のプログラムに対する期待、コンテンツ開発上の問題点、専門家間の協働、メンタリングの意義、費用対効果、教育のパラダイムシフト、等々について、熱いト



クバトルを繰り広げ、会場との質疑応答も大いに盛り上がりました。

また、中間報告では、eLPCOの佐伯胖センター長が「eラーニング育成プログラム」をテーマに、eLPCOの活動内容、問題点および将来構想な

どについて、具体的なデータを示しながら、興味深い報告を行いました。

そして、フォーラムは、魚住清彦副学長のご挨拶で盛況のうちに幕が閉じました。

フォーラム終了後は、青学会館ミルトスに場を移し、意見交換会が催されました。久武雅志常務理事のご挨拶と佐伯胖センター長の乾杯のご挨拶で宴が開き、フォーラムの内容、eLPCOの取り組み、本学の展開、さらには、eラーニングの課題、ICT教育の将来性、等々について、活発な議論が交わされました。

今回のフォーラムは、多くの参加者から高い評価を得ることができました。また、eLPCOとしても、大変有意義なものとなりました。参加者の方々から頂戴した意見等は、eLPCOの取り組み、さらには本学の発展に今後活かしていきます。

フレッシュャーズ・セミナー公開授業に、作家・林真理子氏が登場

昨年度に引き続き、読売新聞社が主管する「活字文化推進会議」とタイアップしてフレッシュャーズ・セミナー「読書の喜びを見出すためのゼミ——食わず嫌いを克服しよう——」を後期に開講します。11月18日(土)午後1時30分よりガウチャー記念礼拝堂を会場にして行われる今年度の公開授業では、作家・林真理子氏に「本に魅せられて」との主題のもと、ご自身の読書遍歴を振り返りつつ、読書の素晴らしさを語って頂きます。

林真理子さんによると、時代の雰囲気や鋭く巧みに切り取り、とりわけ働く女性の現在を、ヴィヴィッドに描き出す作家というイメージが真っ先に浮かんでくるのではないのでしょうか。そんな林さんの作品にも、読書好きの母親をモデルとした『本を読む女』、文学少女であった自らの多感な高校時代の精神的遍歴を綴った『葡萄が目にしみる』、更にはご自身が若き日に手

にした名作を平易に解説した『林真理子の名作読本』といった作品があります。ゼミではこれらの作品を読みつつ、公開授業に備えます。講演も大変定評のある方ですが、今回もきっと開講意図に即した心に残る素晴らしい内容の授業を展開していただけることでしょう。

さらに2005年7月に成立した「文字・活字文化振興法」により、小・中・高校などの各教育段階でも、児童・生徒の活字離れを防ぎ、読書の習慣を身につけさせるためのさまざまな教育的取り組みがなされつつあります。そのような動きに本学も積極的に関わっています。なお、林真理子氏の公開授業は「21世紀活字文化プロジェクト」のウェブサイト(<http://katsujiyomiuri.co.jp/>)から申し込みができます。

(国際政治経済学部教授 嶋田 順好 記)

青山ビジネススクール創立15周年記念国際シンポジウム開催

2006年10月28日(土)、青山キャンパス総研ビル・国際会議場にて、本学大学院国際マネジメント研究科(青山ビジネススクール)と国際連合大学の主催による国際シンポジウム21世紀の「ビジネススクールの役割—ビジネスにおけるダイバーシティ・マネジメントとアジアの持続的発展—」が開催されます。この国際シンポジウムは、本学の高度専門職業人養成

の大学院教育＝青山ビジネススクール開始15周年を記念するとともに、平成18年度「魅力ある大学院教育イニシアティブ」で採択された国際マネジメント研究科の“国際マネジメント実践的研究者育成”の事業計画の一環として企画されました。当日は国内外の第一人者による講演およびパネル討論が予定されています。

2006年度青山祭、実行委員長からのメッセージ

青山祭LIVE2006では「The Gospellers」が登場し、一般の方々も多数来場。マスメディアも注目する青山祭は、全国でも屈指のスケールと内容を誇る大学祭。2006年度実行委員長から、学生のみなさんへのメッセージをお届けします。



2006年度「青山祭」は、10月28日(土)には青山祭LIVE2006が開催されます。10月28日(土)～30日(月)の3日間に本祭が開催されます。

今年度のテーマは「For this “4DAYS”」。青山祭は、学生が主体となって創り上げ、学生による、学生のための、学生一人ひとりが楽しめる「祭」であり、多くの青学生が一つの目標に向かって頑張るかけがえのない4日間です。この“4DAYS”のためにみんなで力を合わせていこう!……私たち実行委員のそんな思いが、テーマに込められています。毎年恒例の本部企画、著名人の講演会、そして青学生によるミュージックフェスティバルやダンスフェスティバルなどを筆頭に、他の大学祭では味わうことができない青学ならではの「祭」を今年も創っていきたいと思います。また、開催期間中のゴミ減量化やエコ容器の使用など、環境問題への積極的な取り組みも青山祭の大きな特色です。クリーン&エコな青山祭とするためにも、どうかみなさんのご協力をお願いします。

なお、出演アーティストや講演会などの最新情報は、青山祭ホームページ(<http://www.aoyamasai.com/>)に順次アップします。多くの方のご来場をお待ちしておりますので、在学生はもちろん、卒業生、ご父母の方々もぜひおいでください。

2006年度青山祭実行委員長 **地島 史洋君**(法学部法学科)



クリスマス・ツリー点火祭～降誕を待ち望む礼拝～が青山・相模原で行われます

イエス・キリストの降誕を祝うクリスマスまでの4週間、アドヴェント(待降節)を心に刻むために、青山学院全体がひとつになって行われる礼拝が、クリスマス・ツリー点火祭です。今年度は12月1日(金)の夕刻に青山・相模原両キャンパスで行われます。当日相模原キャンパスで素晴らしい演奏を聴かせる大学聖歌隊とハンドベル・クワイアの学生からのメッセージをお届けします。



大学聖歌隊 隊長
経済学部経済学科 **光延 伊知朗君**

私たち大学聖歌隊の讃美の歌声は、点火祭のほか、学院の各種礼拝、10月の定期演奏会、クリスマスコンサートなどで聴くことができます。また、夏休みには「演奏旅行」として各地の教会、学校、福祉施設などでも歌っており、今年は北海道に行きました。そんな活動の中でも、青学生と相模原キャンパス近隣住民の方々をはじめ多くの方々を前に、屋外で歌う「点火祭」での奉仕は、特別な意味を持つものと考えています。初心者だった1年生の時に点火祭で味わった感動は、32名の隊員を率いる隊長となった今も決して忘れることができません。

ハンドベル・クワイアの美しい演奏ともども、点火祭当日は、心ゆくまでイエス・キリストの降誕を待ち望む喜びを味わっていただきたいと思います。12月上旬はすでに冬の寒さが迫る季節ではありますが、多くの方々が私たちの歌声に耳を傾けてくださる姿を見ると、心がぽっと温まり、不思議に寒さを感じません。聴いていただく方にもその温かさを分かち合っていたらよい、今年も隊員一同、心を込めて歌います。



ハンドベル・クワイア 隊長
文学部史学科 **田島 由佳子さん**

点火祭で演奏できることは、私たちハンドベル・クワイアにとって大きな喜びです。今年も、同じく青山学院大学宗教センターに所属する大学聖歌隊と力を合わせ、アドヴェントにふさわしい夕べを創り上げていきたいと思っています。

室内と異なり音が拡散する屋外での演奏には難しさもありますが、空気が澄んだ晩秋の夕闇を背景に演奏する気分は、また格別です。昨年度は隊員は全員女性でしたが、今年度は2人の男性隊員が加わり、より力強く、重厚感のある和音をお聴かせすることができるはず。ハンドベルの魅力はなんといっても「音色」の美しさですが、演奏方法の部分にも注目していただくと、よりいっそう楽しんでいただけるのではないかと思います。また、今年から新たにハンドベルの兄弟楽器ともいえるトーンチャイムを導入しましたので、演奏のバリエーションもさらに広がっています。

今回の点火祭を通して、隊員一同、心を一つにしてキリストの降誕を待ち望みつつ、皆さまの心に残るような演奏をお聴かせしたいと思います。ご期待ください。



米津 明生 (COE研究支援者、PD)さんが、 第49回AEWGの Student Awardを受賞

小川武史(理工学部機械創造工学科教授)研究室に所属する米津明生(COE研究支援者、PD)さんが、2006年6月21日(水)カリフォルニア大学バークレー校で開催された第49回AEWG(Acoustic Emission Working Group)において、Student Awardを受賞しました。

今回の受賞対象となったのは、『Hybrid Technique of AE and Corrosion Potential Fluctuation for Stress Corrosion Cracking Study(応力腐食割れ研究のためのAEと腐食電位揺動のハイブリッド技術)』と題する研究論文です。

この論文は、米津さんが本学の大学院理工学研究科機械創造コース博士課程在籍中に書かれたもので、AEと腐食電位揺動法を組み合わせた新しいハイブリッド技術を提案し、応力腐食割れのモニタリングおよびメカニズム解析を行った研究です。

AE…破壊が発生する際に生じる弾性波のこと

会計プロフェッション研究科長 鈴木 豊教授が、 会計大学院協会理事長に 選任されました

5月13日(土)、本学大学院会計プロフェッション研究科長鈴木 豊教授が、早稲田大学大学院会計研究科長 加古宜士教授の会計大学院協会理事長職退任に伴い、新たに会計大学院協会理事長に選任されました。

会計大学院協会は、「会計大学院(文部科学省専門職大学院設置基準により設置された会計に関する専門職大学院をいう)相互の協力を促進して会計大学院における教育水準の向上をはかり、もって優れた会計職業人を養成し、社会に貢献すること」を目的としています。新体制は、教育水準の維持の向上のためのFD活動等の喫緊の課題と会計大学院のインセンティブを高めるための中長期的課題解決のための執行組織として位置付けています。

会計大学院協会会員

正 会 員：青山学院大学、北海道大学、東北大学、早稲田大学、明治大学、中央大学、
法政大学、千葉商科大学、LEC大学、大原大学、愛知大学、関西学院大学、
甲南大学、関西大学、立命館大学

準 会 員：慶應義塾大学、専修大学、同志社大学、熊本学園大学、TAC大学

賛助会員：日本公認会計士協会、日本税理士会連合会、国際会計教育協会

21世紀COEプログラム 第6回国際シンポジウム 先端材料の創成とAE・超音波による評価(AAUM)について

2006年7月28日(金)、相模原キャンパス・ビューラウンジで60名の参加者を集めて表記シンポジウムが開催されました。この国際シンポジウムは、本学COE研究プロジェクトのうち「高効率電子素子および機械部材に用いる高品質・大面積ダイヤモンドの創成と評価」を担当する澤邊厚仁(電気電子工学科教授)、小川武史、竹本幹男(いずれも機械創造工学科教授)のグループが主催。7件の招待講演と9件のポスター講演で構成され、講演会後には3研究室及び分析センターのラボツアーと懇親会が行われ、盛会裏に終了しました。

招待講演では、本学から澤邊教授、産総研から新井和昭博士と長谷川雅考博士、旭ダイヤモンド(株)の池田隆二博士、(株)東芝から落合誠博士、スイスEMPAのBrunner博士、ドイツVallen System GmBHのHartmat Vallen氏が講演を行い、英語での活発な討議が行われました。

まず午前中は、機能性ダイヤモンドの創成と特性評価に関する3件の講演を実施。澤邊教授は世界で初めて成功した1インチ直径のダイヤモンドウエハーの製造技術と電子素子への展望を、長谷川博士はマイクロウェーブ・プラズマCVDによる常温での大面積のナノダイヤモンド創成技術と特性・応用、そして池田博士は、CVDダイヤモンド膜(切削工具)の力学特性を測定する新しい手法とそれを用いたダイヤモンド膜の弾性スティッフネス、残留応力、密着強さの測定結果を紹介。21世紀の産業技術に新しい風穴を開けるであろう機能性ダイヤモンドの展望に関する熱心な討論が展開されました。

午後は、先端超音波の計測と特性評価・状態監視に関する4件の講演を実施。AEを用いる超伝導コイルの摩擦とクエンチングの検出(新井

博士)、レーザ超音波を用いた原子炉内部の欠陥(応力腐食割れ)サイジング(落合博士)、新しい線状PZT素子を用いた超音波発信・検出法(Brunner博士)、最先端のAE計測・信号処理システム(Vallen氏)が紹介されました。

ポスターセッションでは、澤邊研から2件、小川研から2件、竹本研から5件の報告があり、大学院生による熱心な説明と質疑が英語でなされていました。本サブプロジェクトは、ダイヤモンドの創成・評価を担当する研究室と材料特性や状態監視を行う研究室から構成されており、コーディネイトに苦勞しながらも、最先端技術に関する有意義な情報交換、および若手研究者の育成や英語講演の訓練の面でも大きな成果を得ることができました。

なお、本シンポジウムを介して、今後、2件の新しい国際共同研究プロジェクトが具現化する予定です。



2006年度課外教育プログラム活動報告

本学では大学後援会のご支援の下、青山学院の教育方針を具現化すべく、課外教育プログラムを実施しています。2006年度前期～夏期休業中に行われた行事を振り返ります。

●交流陶芸教室 — 新入生・在校生交流企画 — (外部施設にて)

5月6日(土)、午前と午後の2グループに別れ、各20名の新入生および在校生が新宿の陶芸教室に集い、手作りの器作りに汗を流しました。

最初は、何を作るか迷っていましたが、一度作る物を決めると手口口を用い、器用な人もそうでない人も精一杯作品作りに励んでいました。

終了時間が近づくと、参加した学生同士の作品品評会が始まり、笑いや感嘆が入り混じったやり取りが交わされていました。



この後は、素焼きを行い、更に釉薬をかけて本焼きの行程が必要ですが、時間の関係もあり、完成見本を参考に陶芸教室にその後の行程をお願いして終了になりました。

3週間後、大学に届いた作品を参加者に渡した時の顔が、笑顔に包まれていました。

●上級救急救命講習会(青山キャンパス)

6月14日(水)、青山キャンパス4号館器楽練習室にて、「上級救急救命講習会」が、30名の参加により実施されました。

課外活動が本格化する夏期を前に、不慮の事故・事態に対する正しい応急・救命手当を学ぶことで、自ら対応できるように企画されています。今年度も渋谷消防署のご協力により、8時間の実習を行いました。午前中は学生一人ひとりが人形を相手に、心肺蘇生法の練習。最初は救助を求める発声など、恥ずかしい気持ちが先立っていましたが、慣れてくるに従って、真剣な表情へと変わっていきました。後半にはAED(自動体外式除細動器)を使用した早期除細動の講習を行いました。まだ一般には見慣れない除細動器の扱いにも消防署の方の指導により円滑に扱う事ができました。早期の除細動実施は、緊急の処置を必要とする患者を救命することにおいて、非常に有効な手段であるとされており、今後の救急救命において重要な機器になると考えられます。不慮の事故への対応はほんの数分が生死を分けると言われていいます。この講習を通して、このわずかな時間の重みを理解し、適確な対応ができるようになることを期待したいと思います。



●手話講座(相模原キャンパス：集中講座3日間)

9月13日(水)～15日(金)、日頃手話に関心を持ち、ボランティアに役立たいと考えている学生に、簡単な手話表現を学ぶ機会をと考え、手話講習会を実施致しました。

実際に聴覚障害を持った講師の先生をお招きして、名前の表現の仕方、挨拶、数の数え方など、基礎的な手話表現を学びました。手話講座は普段の講義と違い、音が無く、手と体が動く音だけが聞こえて、非常に静かな講座ですが、習得した手話で伝えようとする学生たちの表情はとても豊かで、生き生きとしていました。

講師の先生からは、正式な手話表現にとらわれず、まずはどんな形であれ、手や表情を使って伝わるように工夫する、そして遠慮せずに聴覚障害者へ話しかけて欲しいとのアドバイスを頂きました。この講習会に参加した学生が、聴覚障害への理解を少しでも深め、ボランティアに役立ててもらえればと思います。



「東ティモールの現状と私たちにできること」特別講演会を開催

2006年7月4日(火)、青山キャンパス総合研究所ビル6階、14605教室において、東ティモールのNPO団体で活動し、このたび一時退避帰国された伊藤洋子氏(本学経営学部卒)が東ティモールの現状と人々の生活についての講演を行いました。



法務省より第1回「新司法試験」の最終合格者が発表されました。

9月21日(木) 16:00、法務省より「新司法試験」の結果が発表され、本学法務研究科(法科大学院)からは5名の合格者がありました。本学法務研究科からの同試験受験者は14名(短答式試験の合格に必要な成績を得た者は10名)でした。

「新司法試験」は、法科大学院の修了者に受験資格が与えられ、今年初めて実施されました。

Club & Circle Information

問い合わせ先 〒150-8366
青山学院大学学生部学生課
Tel 03-3409-7835

*主な文化連合会・体育連合会の活動予定。
下記大会演奏会の日程・場所は予定のものです。今後変更になる可能性もあります。

主要活動予定(2006年10月～2007年1月)

- English Speaking Society チャーチル杯スピーチ大会(10月)
- 青山学院管弦楽団 第89回定期演奏会(11月)
- 吹奏楽バトントフリング部 第39回定期演奏会(11月)
- 競技ダンス部 全日本学生競技ダンス選手権大会(12月)
- ロイヤルサウンスジャズオーケストラ 第38回定期演奏会・太田市大学Jazz Festival(12月)
- 二部合唱部コール・フロッシュ 第40回記念定期演奏会(12月)
- 合気道部 全日本学生合気道演舞大会(11月)
- 居合道部 全日本居合道大会(11月)
- 剣道部 第24回全日本女子学生剣道優勝大会(11月)
- 少林寺拳法部 少林寺拳法全日本学生大会(11月)
- バスケットボール部 第58回全日本学生選手権大会(11月)
- 航空部 第22回関東学生グライダー競技会(12月)
- サッカー部 第55回全日本大学選手権大会(12月)
- チアリーディング部 全日本学生選手権大会(12月)
- 馬術部 全日本学生馬術選手権大会(12月)
- バレーボール部 全日本選手権大会(12月)
- ラグビー部 関東大学対抗戦(12月)
- 卓球部 全日本卓球選手権大会(1月)

主要活動報告(2006年7月～9月)

- 硬式野球部 全日本大学野球選手権大会 準優勝
- バレーボール部(女子) 第25回東日本大学バレーボール選手権大会 優勝
- チアリーディング部 Japan Capチアリーディング日本選手権大会 総合9位

News Index 2006.7

2006年7月に大学ウェブサイト掲載されたニュースの主なタイトルを掲載しています。

06年7月

- 竹本幹男教授(理工・機械創造工)が、第49回AEWGのJoseph Kaiser Achievement Awardを受賞
- 須加良介さん(理工学研究科博士後期課程3年)が電気学会全国大会「優秀論文発表賞」を受賞
- 理工学部研究生を対象に藤田先端学術奨学金、藤田先端学術賞が設立

2006年度 給付奨学金・学業奨励賞

青山学院大学給付奨学金は、各学部所属する2年生以上の学生で、前年度において卓越した学業成績をあげ、かつ人物において優れている者を対象に、有為な人材の育成に資することを目的に学資金が給付されます。また学業奨励賞も同様の資質を持つ学生を対象に、学業奨励に資することを目的に贈られます。また、青山学院大学大学院給付奨学金は、

本学大学院に在籍する学生のうち、学業成績、人物とも極めて優秀と認められる者に対して学資金の給付を行うことにより、将来、社会および文化の発展向上に寄与する人材の育成に資することを目的としています。

2006年度は、青山キャンパス ガウチャー記念礼拝堂(6月21日(水))において授与式が行われました。

〈給付奨学金・学部〉

教育学科/梅基 彩香
 英米文学科/稲葉 直美、徳永 祐美
 フランス文学科/内藤 かおり
 日本文学科/杉山 希美
 史学科/今井 優子
 心理学科/鈴木 麻衣子
 経済学科/堀 恭子、日下部 沙織、松田 希沙
 法学科/新見 眞史、加藤 裕之、小泉 健太郎
 経営学科/佐藤 美帆、古見 友紀、能宗 明子
 物理学科/折笠 雄太
 化学・生命科学科/藤田 華奈
 電気電子工学科/小野 純和
 機械創造工学科/中下 恵介
 経営システム工学科/本瀬 陽介
 情報テクノロジー学科/川口 純一
 国際政治学科/二藤 萌子
 国際経済学科/井本 悠樹、房本 亜希、鳥村 直樹
 第二部教育学科/君野 健二、石井 多美
 第二部英米文学科/岩瀬 しず香
 第二部経済学科/後藤 亮紘、富田 玲奈、鶴丸 隆房
 第二部経営学科/樋口 三江子、大和田 ちなみ、西條 玲子

〈給付奨学金・大学院〉

史学専攻/野村 岳
 英米文学専攻/青藤 弘平
 経済学専攻/小池 文人

経済学専攻/田中 宏典
 経営学専攻/丸山 茂樹、上嶋 裕久
 理工学専攻/藤原 真彦、北村 主税
 国際コミュニケーション専攻/山田 ひろみ、小木 邦子
 国際マネジメント専攻/小高 義和、安田 摩希子

〈給付奨学金・外国人留学生〉

日本文学科/金守英、金華実、李 滿紅
 経済学科/呂 亞楠
 経営学科/黄 申華、許 育敏、劉 怡廷
 国際経済学科/謝 青

〈学業奨励賞〉

教育学科/伊勢 明子、野澤 雅人、松本 光、森永 瑞穂、藤田 純一
 英米文学科/佐藤 美紀、堀江 美帆、渡辺 明日香、井上 輝美、菅谷 安紀子、中村 由紀子、矢後 敦美、出頭 久美子、高瀬 麻帆、寺澤 裕美
 フランス文学科/穴澤 紗織、黒柳 愛子、沼田 歩美、岡田 憲二
 日本文学科/山口 百恵、植田 沙羅、金子 萌、安彦 博子
 史学科/久場 萌、小野瀬 あや、富田 絵美、飯吉 杏菜
 心理学科/石渡 彩乃、須崎 雄介、原 真幸、豊島 泰子、桑山 麗子
 経済学科/秋葉 俊平、川野 真由、西方 遼介、野田 那津子、宮崎 楓、青木 エリカ、金内 健、小林 功太、平塚 卓、鈴木 康史、飯田 有希奈、杉本 康明、免澤 清佳、羽田 夏希、松田 京子
 法学科/高橋 侑穂、中島 礼香、中村 一輝、三浦 香苗、溝道 めぐみ、小金井 達也、下山 慧子、鈴木 啓太、松本 綾乃、宮崎 なつみ、杉田 潔信、高橋 裕美、橋本 淳美、三浦 美波、吉岡 佑実子

経営学科/小林 愛、重田 佳子、島田 亜裕美、中川 悠季、吉岡 絵美、荒井 亮輔、木次 剛規、木村 紗希、坂本 望、宮村 健史、蔭盛、張 妹博、野村 朋子、松浦 佑亮、李 媛浩
 物理学科/伊藤 英俊、嘉屋 絵美、舟島 義人
 化学科/加藤 裕美子、澤野 恵梨香、城 敦子
 電気電子工学科/石橋 孝裕、石原 知明、根津 知子
 機械創造工学科/和田 一正、安部 翔一郎、細野 美奈子
 経営システム工学科/川下 隆司、西川 達也、渡部 綾子
 情報テクノロジー学科/大塚 純二、久保谷 篤、行貝 昌彦
 国際政治学科/加藤 千尋、高田 恵子、菊川 彩香
 国際経済学科/川邊 理恵、山田 学

第二部教育学科/磯崎 祐介、萩原 直美、向井 江美
 第二部英米文学科/泊 恵子、藤本 恵子、吉宇田 綾子
 第二部経済学科/岡島 以知子、延藤 哲史、三浦 拓史、赤池 達朗、神田 麻貴子、西谷 俊彦、遠藤 久美子、片山 哲、加藤 慎也
 第二部経営学科/柴草 博美、橋本 傑、内堀 智子、西岡 猛、佐々木 麻希子、富澤 未佳



2006年度 就職関係行事

行事タイトル	対象者	日程	備考
就職ガイダンス(3年生対象同一内容3回開催)	学部3年生中心	9月27日(水)・9月30日(土)	3年生対象の第1回就職ガイダンス。就職部長による講演と今後の支援スケジュール説明。ガイドブック配付及び就職情報誌の紹介。
就職基礎講座(就活の流れ)	学部3年生中心	10月2日(月)・10月4日(水)・10月6日(金)	就職活動の流れに沿って、進路・就職センター職員が丁寧に説明いたします。
職業適性テスト	学部3年生中心	10月4日(水)・10月7日(土)	自己の職業への興味、パーソナリティ、能力を知る(有料)
自己分析セミナー	学部3年生中心	10月14日(土)・10月16日(月)	今までの自分を振り返り、今後の職業選択につなげる
4年生体験報告会	学部3年生中心	10月10日(火)・10月11日(水)	充分な就職活動をして内定を得た4年生が、後輩のために経験談を語ります。
SPI対策講座	学部3年生中心	10月11日(水)・12月9日(土)	採用試験に多くの企業で取り入れているSPIテストの対策講座(有料)
公務員採用試験説明会*	学部3年生中心	10月16日(月)～	各省庁、都、県、市などの公務員採用担当者による説明会
就職講演会(社会人になる前に知っておくべきこと)	学部4年生対象	10月18日(水)	学内教員による労働関係の法律を中心とした講演
職業適性テスト解説	学部3年生中心	10月21日(土)	検査結果の見方についてのガイダンス
一般常識テスト	学部3年生中心	10月21日(土)・12月21日(木)	採用試験に多くの企業で取り入れている一般常識テストの対策講座(有料)
働く女性セミナー・メイク講座*	学部3年生中心	11月1日(水)	活き活きと就職活動をするためのメイク講座
面接試験対策講座	学部3年生中心	11月2日(木)・11月11日(土)	採用試験で必ず行われる面接を、自信を持って受けるための心構え。
エントリーシート対策シリーズ	学部3年生中心	11月4日(土)～12月	エントリーシートの役割、効果的な書き方を講義し、実際に書いたシートを添削(有料)
航空業界セミナー	学部3年生中心	11月6日(月)	人気のある航空業界の研究と、採用の流れ。
仕事研究セミナー(職種別)	学部3年生中心	11月8日(水)	営業、MR、SEなど、仕事の内容をイメージできるようにするために。
第二部学生による就職応援講座*	第二部全学生	11月10日(金)・11月14日(火)	充分な就職活動をして内定を得た第二部の4年生が、後輩のために学生生活の過ごし方や就活経験談を語ります。
マスコミQ&A	学部3年生中心	11月20日(月)	マスコミ志望の学生のために、実際にマスコミ社会で活躍されている先輩が仕事の醍醐味を語ります。
人事採用担当者の本音(面接対策)	学部3年生中心	11月21日(火)	こんな学生を採用したい、こんな学生はいらない!人事担当者の本音。
OB・OGによるパネルトーク*	全学生対象	11月25日(土)	実社会で活躍する先輩の姿に触れ、社会人のモデルを描き出し今後の活動につなげる。
マナー講座*	学部3年生中心	11月27日(月)	説明会、面接、OB・OG訪問。あらゆる場面で必要となる基本的なマナーについて。
業界企業研究セミナー①	学部3年生中心	11月30日～12月20日(水)	業界をリードする企業の人事担当者、OB・OGによる説明会。教室形式。
卒業生による業界研究講座*	学部3年生中心	12月2日(土)	各業界で活躍する卒業生のパネルトーク。
模擬面接講座	学部3年生中心	12月16日(土)	OB・OGの協力で、本番さながらの模擬面接を体験し、戦略的な面接の技を体得します。
公務員試験合格者報告会*	学部3年生中心	12月16日(土)	各種の公務員試験に合格した4年生に、試験対策やアドバイスを語っていただきます。
OB・OGとの交流会*	学部3年生中心	2月3日(土)	各業界の若手OB・OGと直接話をする中で、働く姿をイメージし、職業観を深める。
業界企業研究セミナー②	学部3年生中心	2月下旬	本学学生の採用実績のある企業を中心に開催。ブース形式で直接人事担当者と話ができます。

* 全ての行事に大学院生も参加できます。 *印は1年生から参加できます。 詳細が決定したい、学生情報サービス、掲示板等でお知らせします。

理工学部就職情報システム

相模原キャンパス
学生支援ユニット進路グループ

理工学部独自の就職情報を提供するシステムです。
 企業・団体から理工学部各学科、および進路グループ宛に送付されてきた求人票を閲覧できるほか、学内で開催される企業説明会のご案内、進路グループからのお知らせなどを閲覧できます。
 ここに掲載された求人票は、就職情報会社が提供するものとは異なり、本学を限定しているケースが多いので、学校推薦での応募等のチャンスを逃さないためにも、必ず目を通すようにしてください。追加募集や、秋採用などの情報もタイムリーにお知らせしています。

行事タイトル	対象者	日程	備考
第1回就職ガイダンス・内定者報告会	学部3年・院1年	10月4日(水)	就職全般のオリエンテーション・就職内定した先輩の貴重な活動体験を聞く会
SPI模擬テスト	学部3年・院1年	10月11日(水)・11月4日(土)	多くの企業が実施している代表的適性検査(有料:1000円)
業種別内定者による相談会	学部3年・院1年・化学系会社等志望者	10月18日(水)	製薬、化学品会社等に内定した先輩による相談会
一般常識テスト	学部3年・院1年	10月25日(水)	国語・数理・英語・社会・時事などの一般常識テスト(有料:1000円)
エントリーシート対策講座(自己分析について)	学部3年・院1年	11月1日(水)	自己分析の方法、エントリーシートの書き方を学ぶ
面接対策講座	学部3年・院1年	11月8日(水)	面接の意味するもの、ポイントの説明、模擬面接実施
業種別内定者による相談会	学部3年・院1年	11月中旬	自動車・電気・IT・運輸通信などの企業に内定した先輩による相談会
業界研究会(合同企業説明会)	学部3年・院1年	11月～12月	各業界のリーダー的企業による業界の仕事内容などの説明会
学科就職ガイダンス	学部3年・院1年	2007年1月17日(水)	学科就職担当委員による学校推薦方法、内部進学などの説明会
企業説明会	学部3年・院1年	2月下旬	各企業の採用担当者による学校で実施する企業説明会
低学年・全学年対象 第2回公務員ガイダンス	相模原キャンパス在籍全学年	12月13日(水)	公務員の種類、仕事内容などの全般的なガイダンス・内定者による報告会

*1～2年生対象行事は第2回公務員ガイダンスを除き前期中に終了しました。

青山学院大学後援会報告

2006年7月14日(金)、青山学院大学後援会評議員会(総会)がアイビーホール青学会館において開催されました。同後援会は、大学と家庭との連絡を密にして意思の疎通を図り、大学の教育及び研究に必要な事業を援助する目的をもって設立された支援団体であり、青山学院大学に在籍する学生の父母及び保証人その他の有志によって構成されております。

主な事業は、下記の大学後援会予算案および決算報告書に示されているとおり、学友会活動補助等の学生活動に対する援助、首都圏ならびに地区別に開催される父母懇談会の開催諸経費等その内容は多岐にわたります。

評議員会は毎年1回7月に開催され、前年度の事業報告および決算報告、当年度の事業計画および予算案が審議され、あわせて役員を選出が行われます。

今回は、昨年に引き続き会長に竹内利明氏(国立大学法人)電気通信大学産学官等連携推進本部特任教授)、副会長に大瀧政明氏(UFJつばさ証券(株)企業開発部部長代理)、新副会長に杵屋弘和氏(長唄宗家派家元十七世杵屋勘五郎)をはじめ、新任・継続あわせて98名の役員が選出されました。

評議員会終了後、席を移し出席された役員の方々、本学院長ならびに学長ほか大学教職員をまじえ、交歓のひとつきもたれました。

2005(平成17)年度 大学後援会決算報告書

収入の部 (単位 円)

科目	予算	決算	差異
前期繰越金	29,031,437	29,031,437	0
会費収入	103,180,000	104,758,000	△ 1,578,000
利息収入	0	0	0
合計	132,211,437	133,789,437	△ 1,578,000

支出の部 (単位 円)

科目	予算	決算	差異
学生生活動関係			
学友会活動補助	33,000,000	32,965,845	34,155
学友会活動指導補助	14,000,000	13,600,000	400,000
保険料	12,000,000	11,982,900	17,100
奨学金事業補助	10,000,000	10,000,000	0
大学行事補助	3,000,000	1,103,542	1,896,458
アドバイザーグループ会費補助	1,100,000	1,075,000	25,000
ゼミナール活動等補助	1,200,000	500,000	700,000
構内環境整備補助	10,000,000	10,000,000	0
奨励金	3,000,000	1,920,000	1,080,000
後援会行事関係			
父母懇談会費	22,000,000	16,265,150	5,734,850
印刷費	150,000	0	150,000
旅費交通費	100,000	60,000	40,000
会議費	1,800,000	1,165,804	634,196
消耗品費	100,000	34,519	65,481
通信費	100,000	55,100	44,900
教職員関係他			
職員研修費補助	11,000,000	9,399,871	1,600,129
教職員福利厚生費補助	2,000,000	1,577,680	422,320
慶弔費	1,000,000	1,120,000	△ 120,000
雑費	200,000	0	200,000
予備費	6,461,437	0	6,461,437
支出計	132,211,437	112,825,411	19,386,026
次期繰越金	0	20,964,026	△ 20,964,026
合計	132,211,437	133,789,437	△ 1,578,000

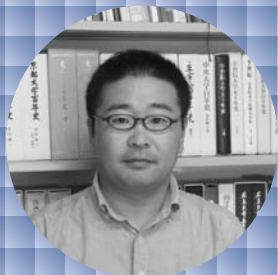
2006(平成18)年度 大学後援会予算

収入の部 (単位 円)

科目	2006年度予算	2005年度予算	差異	摘要
前期繰越金	20,964,026	29,031,437	△ 8,067,411	
会費収入	103,190,000	103,180,000	10,000	会費収入内訳 星間部 @6,000円 × 15,030名 = 90,180,000円 大学院 @3,000円 × 1,350名 = 4,050,000円 第二部 @3,000円 × 1,120名 = 3,360,000円 ◇ @4,000円 × 1,400名 = 5,600,000円
利息収入	0	0	0	
合計	124,154,026	132,211,437	△ 8,057,411	

支出の部 (単位 円)

科目	2006年度予算	2005年度予算	差異	摘要
学生生活動関係				
学友会活動補助	33,000,000	33,000,000	0	学友会クラブ活動補助他
学友会活動指導補助	14,000,000	14,000,000	0	学友会指導者・監督への謝礼(交通費一部負担額)他
保険料	12,000,000	12,000,000	0	学生教育研究災害傷害保険
奨学金事業補助	10,000,000	10,000,000	0	奨学金資金への補助
大学行事補助	2,000,000	3,000,000	△ 1,000,000	大学行事補助
アドバイザーグループ会費補助	1,100,000	1,100,000	0	アドバイザー・グループ会費補助
ゼミナール活動等補助	1,200,000	1,200,000	0	ゼミナール活動補助他
構内環境整備補助	15,000,000	10,000,000	5,000,000	構内環境整備補助
奨励金	3,000,000	3,000,000	0	学業奨励他
後援会行事関係				
父母懇談会費	20,000,000	22,000,000	△ 2,000,000	首都圏及び地区別父母懇談会開催諸費用
印刷費	0	150,000	△ 150,000	役員名簿・決算報告書印刷費
旅費交通費	100,000	100,000	0	事務連絡交通費
会議費	1,800,000	1,800,000	0	評議員会・懇親会費用
消耗品費	100,000	100,000	0	事務用消耗品
通信費	100,000	100,000	0	役員会・評議員会通信費
教職員関係他				
職員研修費補助	0	11,000,000	△ 11,000,000	職員研修費補助
教職員福利厚生費補助	0	2,000,000	△ 2,000,000	教職員同好会補助他
慶弔費	1,200,000	1,000,000	200,000	教職員等の慶弔費用、学友会関係祝金
雑費	200,000	200,000	0	各校友会支部との懇親会補助他
予備費	9,354,026	6,461,437	2,892,589	
合計	124,154,026	132,211,437	△ 8,057,411	



鈴木 勇一郎
文学部 兼任講師

青山スタンダード テーマ別科目 歴史理解関連科目(領域E) 「青山学院大学の歴史」

今年度より、テーマ別科目歴史理解関連科目として開講された「青山学院大学の歴史」。いわゆる自校史教育と言われるもので、学院と大学の歩んできた道を知ることによって、学生一人ひとりに“青山学院で学ぶ意味”を発見してもらうことを目的としています。

学生の皆さんは、この青山学院大学で学んでいるわけですが、自らが学んでいるこの大学の歴史は、身近なようで、ほとんど馴染みがないというのがその実態ではないでしょうか。

この授業はその歴史を知るとともに、他の大学ではなくこの青山学院大学で学ぶということの意味を考えてもらうきっかけを提供することを目的のひとつとしています。

具体的には明治初期から相模原キャンパスの開学までの青山学院および青山学院大学の歴史を通時的にお話しています。

実は、青山学院大学の歴史を語るということと青山学院の歴史を語るということは、必ずしも同一のものではないなど、この学校の歴史を語るのは、かなり微妙なことが多く、また現在のところ適当なテキストもないなど、困難も数多く存在します。

授業では、できるだけこの学校のあらましを知ってもらうために、明治から昭和戦前期の時代については、かなり網羅的に扱っていま

すが、青山学院大学が開設されて以降については、大学紛争や神学科、厚木キャンパス問題など、この大学を語る上において、避けて通ることができない問題にテーマを絞り込んでお話をしている部分もあります。

授業でお話をしていることは、あくまでも担当者らの調査・研究に基づいて、現時点では正しいと思われることを試論として提示しています。ですから、決してこれが正しい歴史だと固定化した話を注入するという性格のものではありません。

したがって、この授業を受講する方は、史料を用いて自分なりに歴史を組み立ててもら

いたいと思っていますが、史料の閲覧体制など、そのためのインフラが未整備などがあるので、もどかしい思いもしているというのが現状です。

いずれにしてもまだまだ始まったばかりで、これからは試行錯誤が続くと思いますが、少しでも興味のある方は、気軽に受講していただければ幸いです。

青山キャンパス風景(1932年)



1949年頃の青山キャンパス正門



学内所蔵の戦前期文書類

「青山学院大学の歴史」を学ぶ意味

青山スタンダード機構 機構長
仙波 憲一

「青山学院大学の歴史」は、本学の歴史を単に知識として学ぶ科目ではありません。学院が歩んできた道を知ってもらうことで、学生一人ひとりに青山学院の一員としての自覚と誇り＝アイデンティティを持っていただき、それぞれの“青山学院大学で学ぶ意味”を発見してもらいたい……この科目に込められたそんな私たちの願いは、もともと「青山スタンダード」全体の趣旨に織り込まれていたものでした。

この授業を通して、本学の建学の精神、教育目標、スクールモットーの背景はもちろん、なぜ校名に“学院”が付くのか、あるいは青山キャンパス内の校舎・建物の配置の意味までがあきらかになってくるでしょう。また、歴代院長・学長の足跡から、キリスト教を核

にした日本近代史のたいへん興味深い一側面が浮かび上がってきます。学生のみなさんは、そうした本学の歴史の重みを実感しながらそれぞれの専門分野の学問に向き合うことによって、より深い学びを得ることができるはずです。

なお、「青山学院大学の歴史」は、相模原キャンパスだけではなく、夜間部の学生やこの科目を受講できなかった3・4年生を対象に、青山キャンパスでも開講されています。できるだけ多くの学生に受講していただきたいと考えていますので、将来的には必修科目化も視野に入れていきます。さらに、本学で学ぶアイデンティティを深めるさまざまな試みを展開していきたいとも考えています。ご期待ください。

オープンキャンパス開催報告

2006年度オープンキャンパスは、7月16日(日)相模原キャンパス、7月23日(日)および9月17日(日)に青山キャンパスにおいて開催されました。7月は相模原キャンパスにて5,016名、青山キャンパスにて10,926名、そして9月には、4,470名の高校生とその保護者のみなさまが来場しました。総来場者数は20,412名となり、本学への関心の高さがうかがえました。「吹奏楽パトントワリング部」「応援団」「チアリーディング部」「ハンドベルクワイア」「アナウンス研究会」などの学生団体をはじめ、青山スタンダード概要紹介、各学部・学科の紹介や模擬授業、英語入試

問題解説など様々な企画を、在学生・教職員の協力を得て実施いたしました。また例年のように実施にあたり多くのボランティア学生が受付や案内誘導で協力してくださり、来場者に、明るく親切に対応している姿が見られました。

なお、7月29日(土)には、青山キャンパスにおいて、社会人を対象としたオープンキャンパスも開催、462名(昨年度500名)が来場しました。キャリアアップをめざす向学心の強い方ばかりで、充実した説明・懇談が実施できました。



相模原キャンパスでのボランティア学生のみなさん



青山キャンパスでのボランティア学生のみなさん

高校1・2年生のための大学説明会

高校1・2年生の早期より、本学への進学を希望している高校生とその保護者を対象にした大学説明会を開催します。

日 時：2006年11月12日(日)

10:30～16:00(予約不要、入退場自由)

場 所：青山キャンパス

開催内容(予定)：歓迎礼拝／ハンドベルコンサート／保護者を対象とした大学ガイダンス／全学共通教育システム「青山スタン

ード」概要紹介／大学紹介／入試概要紹介／大学紹介ビデオ上映／資料閲覧／資料配布(大学案内パンフレット等)／個別進学相談／リスニング試験体験／在学生による合格体験トークライブ／在学生による個別相談／学生団体によるアトラクション等

※詳細な企画内容および時間は、大学ホームページをご覧ください。
<http://www.aoyama.ac.jp/admission/college/index.html>

アドバイザー・グループ紹介 ⑧

「わが母校、青山学院」〈黒沼アド・グル〉

本アド・グルのキーワードは「わが母校、青山学院」。主に第二部の学生を対象として、母校への帰属意識を高めてもらうための活動を展開しています。日常の活動は毎週金曜日夜7時半～8時までの30分間、総研ビル地下のカフェテリアに都合が付きメンバーが集まり、自由に雑談を楽しんでいます。その中で共通の話題に話が弾んだり、誰かが抱えている問題にみんなで取り組んだりすることで、メンバーが共通の時間と空間を持てるようになります。

また、メンバーの自己実現＝「何かをやりたい」思いのサポートも行っています。以前、ほんの数人でビデオ作品を作り、青山祭に参加できた時の喜びは今でも忘れません。

第二部の学生にもキャンパスライフを楽しみたいと考える人

は多いのですが、実際は時間的にもなかなか難しく、そんな彼らがアド・グルの仲間と少しでも学生生活を楽しんでくれたらと願っています。メンバーに30～40代の社会人が加わると、その影響を受けた10代の新入生たちが急速に成長するのですが、それも第二部ならではの喜びといえるでしょう。

さまざまな思いを抱き本学に入学してきた学生たちですが、卒業時には心から「青学で学ぶことができて良かった!」と思ってもらいたい……そのために、折に触れて、私自身も学んだ母校・青山学院がどのような学校なのかを話し聞かせ、母校愛を伝えていきたいと思っています。



経済学部 黒沼 健 教授

AGUニュースについて

青山学院大学では、大学広報誌「AGUニュース」を年5回(1月、3月、5月、7月、10月)発行し、在学生の保証人の方々へ送付しています。また、在学生を対象としてキャンパス内AGUニュース専用スタンドにて配布しています。

●なお、「AGUニュース」を確実に保証人の方々へお届けするため、住所が変更になった場合は、住所変更の手続きをお取りください。

青山キャンパス→学生部厚生課

事務取扱窓口

相模原キャンパス→学生生活グループ